

論文概要

フィリピンにおけるモノづくりを通じた女性エンパワーメントの意義と可能性 ー生計向上支援プロジェクトの事例考察からー

14MD0093

杉山愛

本論文の目的は、フィリピンの生計向上支援プロジェクトで多く採用される手工芸品づくりや食品加工活動が、女性の満足感や達成感、自信の獲得につながり、またそういった体験の積み重ねが、個人としての成果のみならず、集団やコミュニティの利益を考えられる広い視野を養う、意識変化をもたらすプロセスとなる可能性を明らかにすることである。

フィリピンでは、女性大統領アロヨやアキノに代表されるように女性が要職についたり、世界のジェンダーギャップ指数ランキングで上位に入ったりするなど、女性開発政策は先進的であるとされている。一方女性の問題としては、女性への暴力の存在、女性の海外出稼ぎ労働者の増加、労働力の男女比格差などがある。また、貧困下にあるフィリピンの女性には、生活費を稼ぐ役割、子供を産み育てる役割、祭りごとを手伝う役割の三重の役割があると言われ、余暇の時間が十分でないことも問題として挙げられる。貧困解決を目的に広く用いられる生計向上支援により、さらなる経済活動を女性に強いることは、楽しい生活を希求する人間の基本的欲求や、新しい技術・知識習得への欲求の充足、女性自身が自由に取捨選択するような体験ができる余暇の機会を減じかねない。これに加えて、フィリピンの女性たちは、自分たちの持つ力（パワー）について深く考え、行動する機会が乏しい状態にあると言える。なぜならフィリピンでは女性の社会参加や政治参画が早くから達成され、また統計上では他国と比較して男女格差が少ない国とみなされているが、実際のところこの構造を支える貧しい女性たちが、主体的に問題意識をもち行動する機会を阻んでいるからである。以上の背景から、フィリピンの女性にとって、生産的でかつ余暇や娯楽に代わり得る手段として、モノづくりを通じた力の獲得意義を検討する。

なお、本論文では「モノづくり」を、貧しい女性たちでも参加ができ、かつ経済的利益の有無とは別次元の達成感が得られる、手工芸品づくりや食品加工活動を総括的に示す言葉とする。また「エンパワーメント」という概念は広く普及して久しいが、現在も様々な文脈で様々に定義されているのが実態である。モノづくりやエンパワーメントを題材にする先行研究では、経済的なインパクトに加え、活動に伴う女性の満足感、達成感、自信獲得の指摘はあるものの、それらは断片的な記述にとどまっている。そのため、本論文はフィールド調査によって得られた、女性の実際の声に基づいて考察を行う。

研究の方法は、主に文献研究とフィールド調査である。文献研究は、フィリピン女性委員会（PCW）等が提供する統計資料、フィリピンにおける女性政策についての文献、エンパワーメント概念や心理学的理論に関する文献や、手工芸品づくり、食品加工活動を通じた開発を題材とする先行研究の検討が中心である。一方フィールド調査は、2014年8月8日から10月11日の間で実施した。筆者が青年海外協力隊員として携わるフィリピンのソルソゴン州グバット町サンタアーナ村に加え、より一般的な結果が得られるようケソン州ケソン市パヤタス村、ネグロス州シライ市ギンバラオン村／パタッグ村など、複数の事例を選定した。調査方法はインフォーマルな聞き取りや、半構造化質問紙を用いた聞き取り、そして参与観察が中心である。

本論は6つの章から構成されている。まず、第1章では序論として、研究の背景と目的、研究の方法について述べた。

続く「第2章 フィリピンの女性を取り巻く概況」では、フィリピンにおける女性のエンパワーメントを考えていく上で、女性の置かれた状況やジェンダーに関する政策を理解するための、基礎的な情報を示した。「第1節 統計にみる男女格差」では、まず統計資料を用いてフィリピンにおける女性特有の問題として、女性への暴力、女性の海外出稼ぎ労働者の増加、労働力の男女比格差の存在を示した。「第2節 フィリピンの女性政策の概要」では同国の女性政策について、戦略的なジェンダー主流化を推進する政府の取り組みや、ナショナルマシナリーであるフィリピン女性委員会(PCW)により、活発的な法律制定や実践に向けた取り組みがなされていることを特徴づけた。

「第3章 フィリピンにおける女性エンパワーメントの検討」では、本論のキーワードであるエンパワーメント概念を中心に据え、フィリピンの女性の文脈において重点が置かれるべきエンパワーメントを論じた。まず「第1節 エンパワーメント概念について」にて、フレイレやチェンバース、フリードマンらによって論じられたエンパワーメント概念について整理を行った。次に、「第2節 フィリピンの文脈におけるエンパワーメント」では、当事者であるフィリピンの女性たちの現状に立ち返り、フィリピンの歴史的背景や女性の伝統的役割などを概観した。そのうえでフィリピンの女性に必要なエンパワーメントについて、特に心理的な力の獲得の必要性を述べた。「第3節 エンパワーメントの心理的側面の重要性」ではさらに「第1項 内発的動機づけの重要性」で、エンパワーメントの過程においては心理的側面が重要な役割を担うことを、心理学の理論を援用し議論した。また、「第2項 先行研究にみるエンパワーメント考察」では、手工芸品づくりや食品加工活動を取り上げた先行事例におけるエンパワーメントの考察から、検討を行った。

「第4章 モノづくりを通じた生計向上支援プロジェクトの事例研究」では、第3章の先行研究で明らかにされた女性たちにとって必要とされる力の獲得が、フィリピンのモノづくり活動の中でどのような証言、環境、状況において発せられるのかを、フィールド調査で得られた女性の実際の声を反映し、民族誌的に記述しまとめた。「第1節 ソルソゴン州グバット町サンタアーナ村の事例」では、地域の資源を使った手工芸品づくりを行う女性グループの調査結果をまとめた。「第2節 ケソン州ケソン市パヤタス村の事例」では、刺繍づくりを通して女性のエンパワーメントを目指す、NGO支援の事例について調査結果をまとめた。続く「第3節 西ネグロス州シライ市ギンバラオン村/パタッグ村の事例」では、地域で獲れる野菜を使い、元々技術を持った人を中心に始められた食品加工活動を、生計向上支援プロジェクトとして行うNGO支援の事例についての調査結果を記述した。最後に、第4節では小括としてこれまでの調査結果を踏まえ、モノづくり活動から得られる心理的な力に関する共通事項を整理した。

第5章では全体考察として、事例章で明らかになったことを基に、第4章以前の論述を踏まえて考察を行った。「第1節 モノづくりによる女性エンパワーメントの考察」では、第3章で議論したフィリピン人女性の実態と、3つの事例調査から得られた結果を照らし合わせて、手工芸品づくりや食品加工活動によるエンパワーメントの意義について考察を行った。「第2節 フィリピンの女性政策の検討」においては、第2章で述べたフィリピンのジェンダー政策による課題について検討し提言を行った。

そして終章では本論文の目的に立ち返り、「第1節 モノづくりを通じた女性エンパワーメントの意義と可能性」として、議論を通じて明らかになった結果を整理した。また最後に、「第2節 残された課題と展望」では、長期的な変化を見ていく必要性と、女性を取り巻く人々や環境、さらには社会関係や社会構造の影響をみていく必要性を説いた。

ここからは本論の概要について述べる。フィリピンでは、一般的に女性の社会進出が進んでいると言われるが、ナショナルマシナリー(国内本部機構)であるフィリピン女性委員会(PCW)によってジェ

ンダーと開発（GAD）対策が推し進められ、女性のマグナカルタ（MCW）が制定された。また、女性エンパワーメント、ジェンダー平等のための計画が策定され、とりわけそこでは経済的エンパワーメントが重要なファクターとして取り上げられている。このように PCW 主導で、戦略的なジェンダー主流化が推進されてきた。

ここでキーワードとなるエンパワーメントという言葉であるが、第 3 章にてフレイレをはじめとする先行研究者の議論に共通する点を指摘した。それは、エンパワーメントの最終目的として、法的・政治的な変革を含めた社会変革を明記している一方、個人レベルの気づきや意識変革といった草の根レベルの変化が必要とされているということである。そして自己のもつ潜在力への気づきからくる自信や主体性意欲の醸成など人間の内なる側面からの自立性や内発的な力を高めることが前提として重要であり、このことは内発的動機づけの重要性を明らかにした心理学的な側面からもいえることである。本論では、エンパワーメントの定義を「内から生成された興味・好奇心や、知識・技術習得への欲求を満たす過程で、自身の潜在的能力に気づき確信し、発揮することで力を獲得するプロセス」とした。

このような内的な力の獲得という点において、フィリピンの女性には歴史的・社会的な背景から、女性個人の内なる力の獲得を阻害してきた要因があるといえる。まず、フィリピンはスペインの長い統治の後にアメリカの植民地となったことで、周辺国に比べ女性参政権と教育の機会均等、女性の社会進出が早くから進んだことにある。また、女性が労働力としての社会参加を阻止されたことがないことや、女性が社会的に高い位置を占めているという一般的な指標は、一握りのエリート層の女性によるものであり、貧しい女性はその構造を下支えしていることも挙げられる。こうした状況は、貧しい女性たちが自分たちの力について主体的に問題意識を持つ機会を阻んでいると考えられる。

また、エンパワーメントには、自己の持つ潜在能力への気づきによる自信、主体性意欲の醸成、自律性、内発的な力を高めることが前提としてあることは先に述べた。しかし、フィリピンにおける文脈に沿って考えるとき、フィリピンの貧しい女性は、生活のための経済活動や家事、育児に追われており、余暇が少なく、自己の能力を発掘する機会や、主体的に選択し行動できるような自由な時間が不足しているという問題もある。

生計向上支援では、手工芸品づくりや食品加工活動が多く採用されているが、収入向上に伴う経済的なインパクトのみならず、内発的な力の獲得を含めた多面的な変化を見ていく必要がある。一村一品運動や小規模生産プロジェクト、フェアトレードなど、モノづくりの事例を取り上げた先行研究においては、経済的な効用に加え、活動に伴う達成感、充実感、役に立っているという感覚を得られていることがわかる。しかし、女性が製作活動を通して得られるはずである満足感や達成感、自信については支援者である外部者による視点からの記述にとどまり、女性の主観的な声を反映した検討は少ない。そこで、筆者はソルソゴン州グバット町サンタアーナ村、ケソン州ケソン市パヤタス村、西ネグロス州シライ市ギンバラオン村／パタッグ村の 3 地域を対象とし、モノづくりを通じた生計向上プロジェクトの事例を、女性たちの声をもとにして調査、考察を行った。

そして、モノづくり活動を通じた女性エンパワーメントの意義と可能性、またフィリピンの女性政策の検討を行うという 2 つの観点から、明らかになったことを示した。

第一に、モノづくり活動が女性エンパワーメントに与える可能性として、女性主導で行われる手工芸品づくりや食品加工活動などのモノづくりは、女性たちの自信や達成感、自己効力感の助長につながることを指摘した。また、この体験は女性たちの主体性を醸成し、集団やコミュニティの利益を考える視点を養い得る。モノづくりにより得られる心理的な力の共通事項として、調査結果から次の 5 点にまとめられる。1) 技術や知識の活用が容易であり個人レベルで力づけが可能である、2) 役に立っていると

いう喜びを得られる、3) 技術や知識を獲得できているという感覚が生む楽しさがある、4) 試行錯誤や創意工夫を通じた自己決定性がある、5) 個人の「気づき」を越えた集団やコミュニティへの視野の獲得可能性が認められることである。

そして、このプロセスはフィリピンの女性たちの現状に立ち返って考えるとき、特に意義があると筆者は考える。なぜなら、日常的に生活のための経済活動に追われて、娯楽や余暇の機会を得難い経済的貧困下にある女性にとって、モノづくりは経済活動でありながら、同時に娯乐的要素を兼ね備えた体験となり得るためである。事例研究では、モノづくりで得られる楽しみと日常生活における楽しみに連続性をみることができた。また、モノづくりは女性が主導で取り組むことのできる分野であり、創意工夫を通して自己決定が繰り返される体験だからである。加えて、新しい知識と技術習得への意欲が高い女性たちにとって、これらを達成した感覚や体験は作業自体を楽しいと感じられる要素となる可能性があり、女性たちに満足感を与え、さらなる技術向上や活動継続のためのモチベーションへと還元され得る。

第二に、フィリピンにおける今後の女性と開発にかかる政策については、政府やナショナルマシナリーであるフィリピン女性委員会 (PCW) が、女性とジェンダー平等に関して戦略的な取り組みを行っている。このように、政府主導による制度の整備・拡充はもちろん重要だが、一方で草の根レベルで女性たちに直接的な影響力をもつ、地方政府・自治体の果たす役割も大きい。草の根レベルの女性開発プロジェクトにはモノづくりを採用した施策は多いが、経済的側面にとどまらず、本研究で明らかにしてきたように、女性たちの自信や達成感、自己効力感の助長につながるよう、地方自治体による協働が必要である。

本論文は、生計向上支援プロジェクトで広く採用されるモノづくり活動に焦点を当て、女性の実際の声に基づく記述から考察を行ったことや、フィリピンの女性が置かれている実態に沿って、女性たちの心理的な力の獲得や意識変化の可能性について考察を行った点に意義がある。